慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルドルフ・ゴールドシャイドの 人間経済学 に就いて
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.4 (1941. 4) ,p.507(83)- 529(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19410401-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410401-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

容力、即ち生産力擴充如何に掛つてゐる。前者は生産の論理が市場經濟的なものから計畫經濟的なものへ移行する事であり、後者は生産が從前の倫理―利潤原則を揚棄して然も尙ほ完全に遂行される事を必要とする。前述せる如く、獨占經濟がその生産の市場經濟的性格の故に商業を未組織の分野として殘存せしめ、商業論理の相剋を生んだとすれば、商業の論理は倫理の場合に於けると同樣に生産の論理の更新に依つて一貫性を取戻し得るのである。

（四月二日稿）

ルドルフ・ゴールドシャイドの『人間經濟學』に就いて

藤林敬三

内容

一　人間勞働に關する生産政策の重要性の自覺
二　ゴールドシャイドの人間經濟學の基本問題
三　その評價

一

經濟生活の發展に對して、人間の勞働が常に基本的な重要さを持つてゐることに就いては、今更ら詳述する必要もない。しかしこの人間勞働の基本的な重要性の自覺は、最近に至るまでは、經濟生活の發展の裡に、充分の現實的な基礎を持ち得なかつたとも見ることが出來る。そしてこの勞働の重要性の自覺は、勞働の背後にあるものが人間であるといふ點から、從來種々の倫理的觀點に依つて色づけられ、人間の勞働に關しては倫理と經濟の問題が絶へず結び合はされることに依つて、それだけ不鮮明なものとされてゐた。しかもこれが問題を益々複雜なものとした許りではなく、時に倫理的な問題が前面により强く押し出されてゐる場合には、經濟の基盤からは、それは經濟の外からの、第二義的な問題であるとも觀られたし、それだけにまた勞働の重要性が眞實に自覺せられることを妨げた

とも見ることが出來る。

人間の勞働は土地及び資本と共に、吾々の經濟生活を構成する基本的事實であつて、勞働力の質と量並に生產過程に於ける勞働の編制が、經濟生活の發展に重要な關係を持つてゐることは、既にアダム・スミスの特に着目したところであつた。しかし一般に、資本主義的には、勞働力は商品であつて、それの需給關係に應じて、賃銀が增大し、若しくは增大しようとする傾向のある場合に、初めてそれに應じて、勞働の重要性の自覺が高められて來た。またこの勞働力の純粹の需給關係からではなく、別の何等かの事情に基づいて、生產に於ける勞働費が高められようとする場合にも、同樣であつた。從つて資本主義的には、元來僅かに賃銀の大小を目安にして、人間勞働の問題が重要な關心事とせられる現實の基礎を與へられてゐた、といつてもいゝ譯けである。アメリカに於けるティラーの科學的管理法に關する實際的な研究が、既に一八八〇年代に開始せられてゐるのは、特に當時アメリカへの移民事情の變化が齎らした移民勞働力の質的低下に伴ふ經營勞働費の上昇といふ事情と合せて考へれば、充分その現實的經濟的基礎理由が理解し得られる筈である。そしてまた他方では、勞働運動と社會政策の發展とが、共に多少の程度に於いて、少くとも經營勞働費の低減を妨げる限り、資本主義的經營に於ける人間勞働への關心、特に勞働力の使用の科學化、合理化の努力を促したことも亦事實である。

しかし社會政策の生產的意義に就いては別に考慮せられるべきものがある。近頃吾國では大河內一男氏が主張せられるやうに、社會政策に生產政策としての意義が認められることは否定され得ない。社會政策は多少の程度に於いてその發展の初期以來、これを是認する理由の如何を問はず、確かに勞働力の保持、增强、勞働力の再生產の確保といふ意義を持つてゐた。しかも人間勞働に關する社會政策のこの國民經濟的、生產政策的意義は、經濟發展の有ゆる場合に充分自覺せられたとはいへない。資本主義の發展の初期、特にまた自由主義、個人主義的經濟的基礎の下に於いては、社會政策はこの生產的意義に於けるよりは、寧ろ勞働を行ふ人間に關する倫理的な、また「社會的」な政策として、いひ換へれば、經濟的發展のための經濟の內面的な要請としてゞはなく、寧ろ經濟に對する外面的な要請として先づ現はれざるを得なかつた。しかしそれでも資本主義の發展と共に、社會政策の生產政策的意義が幾分認められるに至る。蓋し一方に於いては、資本主義的生產が益々大規模化されるに從つて、其處ではこの大規模生產を圓滑平穩に運營するためには、產業平和が必要であり、經營內では規律あり、訓練ある勞働者の存在が不可欠的要件であつて、經營はこのために自立的に社會政策に近づこうとする。そして此處に Human Factors in Industry といふ問題を生ぜしめたのであるが、しかしまた他方に於いては、資本主義經濟の高度化と共に、各種生產部門の國民經濟的關聯の重要度の進展、特にまた一國經濟の他國經濟との聯關に於ける國民經濟的觀念と事實の重要性の自覺とが、社會政策の持つ生產政策的意義を一歩〳〵是認せしめるに至るからである。

かくて英國に於いては、大體前世紀の中頃以後、色々な人々に依つて、勞働諸條件の改善が勞働生產性の增大を伴ふといふ、謂はゞ生產的社會政策論、生產に於ける人間經濟論が出現し得たのも別に不思議ではない。しかもこの種の生產的社會政策論に於いては、社會政策の發展が一國の經濟生活の發展に伴ふものであり、またこれの條件であるとも考へられてゐる。そして同樣の生產的社會政策論は、ドイツではブレンタノに、アメリカではシェーンホーフに見出される（註一）。しかも尙ほ前世紀末には、レオ・フォン・ブッフの如きは「人間の勞働が家畜の勞働よりも遙かに劣惡な狀態に置かれてゐる」とさへ述べ、人間勞働の生產性の增大のために、勞働者とその勞働力とに關する科學的考究の必要を力說するに至つてゐる（註二）。このやうに一方では、生產的社會政策論が出現せるにも

拘らず、しかも他方では、尙ほ依然として社會政策が一般に勞働者に關する倫理的、或は階級的、社會的な、一般的にいへば、經濟的觀點以上に出でる何等かの觀念に基礎づけられてゐるのは、一部分はむろん社會政策の初期からの傳統的精神にも據るが、更らに社會政策が單なる生產政策ではなく、また經濟政策以上に出ずるものであり、經濟生活ではなく、それを含む社會の構造に關するより高次の政策であると解せられるのにも據る。このやうな意味の社會政策が資本主義發展のある段階に於いて持つところのそれの可能と意義に就いては暫く措くとして、既に生產政策的意義を持つ社會政策を倫理的な、或はまた社會的な根據に立たしめ、經濟外的な政策たらしめた一半の理由が、資本主義的生產が私經濟的利潤の追求を以つて最高の目標としてゐるといふ事實に胚胎すると考へられはしないだらうか。蓋し個別經營の利潤採算からいへば、勞働力は單に商品として購入せられるに過きず、勞働者の運命は彼自らの意圖に任されて居り、勞働力に關する國民經濟的、全體的な考慮は、未だ個別經營に於いては第一義的な重要性を認められる根據を充分持つてはゐないからである。

以上のやうに考へ得るとすれば、從來の謂はゞ私益優先の資本主義的生產の下に於いては、人間勞働に關する經濟的重要性の自覺が、その實踐に於いても亦理論に於いても、未だ充分に達せられず、特に不統一、不透徹な狀態にあつたことも、寧ろ當然であつたといつていゝであらう。しかし今や日支事變を契機として、公益優先の原理の下に、吾國の資本主義は從來の自由主義、個人主義から、全體主義的、統制主義經濟に轉身しつゝある。そして資本主義的個別經營は此處では、先づその生產の國民經濟的、國家的意義の自覺を全般的に要請されつゝある。このやうな前提の下に於いて、初めて個別經營の營利主義的生產政策ではなくして、國民經濟の全體的立場からの生產政策が、よりよく統一的に實施せられる可能性が生れる。そして人間勞働に關する眞に國民經濟的生產政策が、益

益透徹した形態に於いて、展開せられねばならないし、またそれが可能となる。むろんこのやうに、今日吾々が勞働に關する生產政策の緊要なることを、特に痛感せしめられるのは、戰時經濟下に於ける勞働力の量的並に質的不足といふ事實に據ることは否定し得ない。しかしこの事情は勞働に關する國民經濟的生產政策の必要を自覺せしめるには充分ではあるが、勞働力の不足といふ事實自體は、この政策の基本的可能を同時に伴ふものではない。かくて兎も角吾々は現に人間勞働に關する生產政策のこの要請と可能の前に立つてゐるのであるが、しかし現に吾々の持つ勞働に關する生產政策に於いては、一方では尙ほ解決すべき問題が多々あり、他方ではこれ等の問題に對して一定の方向を指示すべき指導的見解が、未だ充分に展開されてゐるとはいへないし（註三）、更らに問題の具體的な解決をよりよく基礎づけるべき科學的研究が、充分に發展せしめられてゐない憾みがある。かくて今日吾々に取つて最も重要な一つの問題は、生產に於ける人間勞働の重要性を指摘し、勞働の生產性を高揚せしむべき諸方策を、充分科學的に基礎づけることである。

このやうな意味に於いて、私が今此處に、ゴールドシャイドの『人間經濟學』の概要を顧慮してみることは、一般の讀者と共に、吾々に取つては全然意義のないことではなからうと考へる。彼の人間經濟學は今から約三十年前のものである。そしてその見解は專ら思辯的に展開され、しかも彼の謂ふ社會生物學 Sozialbiologie の立場に立つものであつて、一般の社會科學者に取つては、或は異樣の見解であるといふやうな感がないではなからうとも思はれる。しかしそれが生產に於ける人間經濟學としては、勞働の生產性の增大を指示する稍々徹底した特異の一見解であることは、否定され得ない點であつて、尙ほこの內に吾々に興味のある點も多少含まれてゐる。しかも彼の時代及び最近時に至るまでは彼の見解を充分受け容れるだけの現實的な基礎が欠けてゐたといつてもいゝのであつて、

事實今日に至るまで彼の見解は余り多くは顧慮されてゐないやうである。しかし現在の吾々に取つては、それでも彼の見解は確かに一顧の價値を持ち得るものである。

（註一）これ等の點に就いては、次ぎの拙稿を參照せられたい。

前世紀後半の高賃銀論（本誌　第三十四卷　第一號）

八時間勞働論と勞働時間最適限論の擡頭（本誌　第三十四卷　第五號）

（註二）L. von Buch, Intensität der Arbeit, Wert und Preis der Waren, 1896, S. 1.

（註三）この點で先づ見るべきものは大河内一男氏の左の著作である。

社會政策の基本問題（昭和十五年七月）

戰時社會政策論（昭和十五年十二月）

この大河内氏の見解に對して、一方に於いては、例へば北岡壽逸氏のやうに、尙ほ依然として社會的正義、公平といふ觀念に社會政策を基礎づけやうとする見解も存してゐるし、（日本經濟政策學會年報　第一輯　經濟政策の諸問題　四六五頁　以後　參照）、また大河内氏の見解が吾國の論者中に一般に受け容れられたとも思はれない。しかし私は、勞働者の生活に關する限り、社會政策を尙ほ Gerechtigkeit の觀念の下に理解しようとすることが、今日既に經濟發展の過程に於ける現實的基礎を持つて居るかどうかは、多少疑問視すべきであらうと考へる。そしてこのやうな見解が生產に於ける人間經濟論、或は勞働經濟論を指配することは、却つて人間經濟論の望ましい發展を妨げるものであることに留意すべきであらう。しかしまた社會政策が單に勞働力に關するものとして、一義的に生產政策であると考へることに就いては、尙ほ多少の問題があらうと考へられる。かくて私は、生產に於ける人間經濟論に於いて問題とせられるのは社會政策ではなく、勞働者政策であると考へたい。

二

ゴールドシャイドの『人間經濟學』Menschenökonomie は、彼の「發達經濟學」Entwicklungsökonomie との關聯に於いて、理解されることが必要であるが、此處では今これ等の基礎見解にまで仔細に立ち入つてゐる餘裕がない。しかし唯だ簡單に、次ぎのことだけは述べて置いても〳〵であらう。

凡そゴールドシャイドの基礎的見解に從へば、經濟の目標は、人間の生命の維持、特にまたそのより高度の段階への發展にある。そして人間の生命のより高度の段階への發展の諸條件を明かにすることが、彼の「發達經濟學」の任務であり、且つ此處に彼に特異の社會生物學の諸問題が展開せられる。かくて彼の發達經濟學は謂はゞ人間中心の經濟學であつて、從つて彼の努力は全體として、從來の富或は財の經濟學に對して、正に人間經濟學を意圖するものであるといつてもいゝ。しかし彼の謂ふ「人間經濟學」はその全體的な立場を表明するものではなくして、これから導き出された特定の部門を構成するものである。しかもそれは彼に於いては彼の總ての考究に對して謂はゞ結論的な重要さを持つものである（註四）。

さて、ゴールドシャイドの發達經濟學の立場から見れば、資本主義の下に於ける人間の濫費は正に許すべからざるものである。蓋し人間の濫費は人間の生命のより高度の發展を妨げる許りではなく、人間の生命の維持さへそのために充分に達せられないからである。この意味に於いて、彼の努力は資本主義の下に於ける人間濫費に對する全面的な抗議として現はれざるを得なかつた譯けである（註五）。そしてこのやうに人間の濫費が無考慮に行はれるのは、彼に依れば、人口過剩に據ると考へられるが、しかし出生率の低下傾向から見れば、それはもはや看過さるべき事實ではない。かくて彼の人間經濟學は、出生率の低下現象に依つて最も強く覺醒された、人間濫費に對する警告で

ある。しかし元來、彼はその發達經濟學に於いて、一方ではマルサスの人口論に對して、他方ではダーウヰンの進化論に對して、極度に反對的な立場を執り、マルサスとダーウヰンを克服することに依つて、彼の發達經濟學の行く可き道が拓かれ、そして此處に人口の增殖とその質的變化發展とを重要視してゐる。そして既にこの基本的考慮から彼の人間經濟學が生れてゐることを見逃してはならないであらう。

更らに、資本主義の下に於ける人間の濫費が、右に指摘したやうに、人間が過剩な存在であるといふ事實に據ることとは否定され得ないが、またこれに應じて、人間の濫費を警告すべき科學的見解の存しなかつたことも亦事實である。通常人間の勞働は土地及び資本と共に經濟過程に於ける三つの重要な要因の內に加へられてゐる。そしてこの內土地と資本は客體的な存在として、これ等は充分科學的に効果的な取り扱ひを受けて來てゐる。しかるに勞働の背後には常に人間が存在し、このために從來の經濟學は誤つて、人間を專ら經濟の主體として取り擧げ、經濟の客體として取り扱ふことを輕視して來た。しかし經濟の客體としての人間は他の物財と同樣に、生產過程を構成する一分肢であつて、人間の生產と能力と償却とが、生產費に重要な影響を及ぼすところの生產要素である。從つてこの人間の生產と利用、人間の加工と消耗の行はれる諸條件を究明することは、重要な一研究分野を構成する。そしてゴールドシャイドに依れば、これが財の經濟學 Güterökonomie に對して考へられる人間經濟學であつて、また人間經濟學は土地資本、產業資本及び金融資本に關する研究に對照していへば、有機的資本學 Lehre vom organischen kapital である。このやうにして、生產過程を構成する一分肢として、經濟の客體として考へられる人間に就いて考慮することは、むろんその勞働力を客觀的に取り擧げることである。そしてこの人間の勞働力、即ち有機的資本の浪費を防止し、その最も經濟的な、最適な利用の方法を發見し、勞働の生產性の增大に寄與せんとすることが、彼の人間經濟學の中心課題である。

ゴールドシャイドに依れば、先づ、「人間の全存在 der ganze Mensch がその勞働力に係はりを持つ、謂はゝ勞働力は全體としての、生けるものとして人體の生み出す果實に過ぎないのである。」そして「加工物としての人間は、生來素質、自然的生長、生來素質に加へられた訓練と教育の統一から生ずる精製物である。」このやうに考へられることから、吾々は容易に次ぎのやうな推論を期待し得る。即ち、全人的存在としての人間は、單にその生來素質に依つてのみ特質づけられるのではなく、寧ろより重要なことは、人間に加へられるところの教育的効果である。更らに既に教育的効果として生來素質に何等かの變容が認められ得るとすれば、吾々は單に狹義の教育だけではなく、一般に廣く生活環境の影響の意義をも、同時に此處に認めなければならない。かくて教育と最適なる環境調整とが生長發展の過程に於ける人間に加へられることは、先づ彼の將來の勞働力の質的向上のために重要なこととなる。そしてこのやうな教育と環境調整とは、更らにその後、勞働力の行使をめぐる環境の望ましからざる影響の防止と共に、次代の人間生產に於いて、劣惡素質の遺傳を抑制し得るといふ點に於いても亦 重要な意義を認めらるべきものであらう。

勞働力が全人的存在としての人間の所產であるといふことは、むろん勞働力が肉體的なものであると同時に精神的なものであることをも意味してゐる。從つて勞働生產性の增大のためには、吾々は肉體的にも、精神的にも、絕へず健康にして有爲なる人物の存在を期待しなければならない。そして此處に、ゴールドシャイドは、社會衛生學と社會政策の生產政策的意味を認めやうとする。即ち、「正しい社會政策こそ本來生產政策である。」しかもこの社會衛生學の諸方策も亦社會政策も、これ等は共に勞働力の保持者である人間の生活環境の最適調整策として、重要

な意義を持つて居り、生産に於ける人間の溢費は、正にこれ等の生産政策の意義を全く解し得ないことの重大な結果でもある。尙ほゴールドシャイドの人間經濟學の立場からは、生産過程に於いて、人間が技術に順應せしめられるのではなく、技術こそ人間に適應せしむべきものであることが、強く主張せられてゐる。

右の謂はゞ勞働力の保持、增强のためには、生産的社會政策の色々な問題が取り擧げられるが、それは歸する所、ゴールドシャイドに從へば、勞働力の適當なる償却 Amortisation の問題である。この勞働力の償却の問題は凡そ次ぎのやうに考へられる。一定の勞働力が生産過程に於いて現實にその役割を果すまでには、既に過去に於いて人間の生産と加工のために、また既に日々その勞働力を維持して行くために、一定の費用が必要である。このやうにして生産せられ、再生産せられる勞働力の使用を最も經濟的なものとすることは、即らその勞働力の償却を經濟的に行ふことである。そしてこのことの可能は、それは必ずしも明瞭に述べられてゐるとはいへぬが、凡そ二つの條件に懸つてゐると考へていゝであらう。即ち、その一つは餘剩價値の生産であり、他の一つは勞働者の生産可能の年限を延長すること、若しくはその短縮を防止すること、いひ換へれば勞働力の償却の期間を出來るだけ延長することである。

餘剩價値の生産はいふまでもなく勞働生産性の增大の結果であるが、ゴールドシャイドが此處で謂ふ餘剩價値は、通常の外面的な、生産物の形態に於ける餘剩價値の外に、有機的、內面的餘剩價値をも含むものである。そしてこの後者の有機的、內面的餘剩價値は、現實の勞働に於いて肉體の行使に依つて各種器官を更らにより强力のものとする、といふ點に於いて認められる。凡そそれは勞働力をより强力、有能のものとする程度に於いて認められると考へてもいゝやうである。これに對して外面的餘剩價値と考へられるものは　むろん彼の發達經濟學に於いて規定せられる所であるが、此處では勞働力の再生産のための客觀的な費用を償ふ以上のものと觀念されていゝであらう。

勞働の生産性の增大を客觀的に表現しようとする、このゴールドシャイドの試みは思辯的には可能のものと考へられやうとも、それは實際上は色々な支障を含んでゐる。第一に彼の謂ふ內面的餘剩價値の生産であるが、それは必ずしも彼自身に依つても明瞭に規定せられてゐるとはいへない。彼は內面的餘剩價値を色々に規定してゐる。即ち、それは作業上の練習の効果といふやうな事實に就いても考へられ、或はまた作業者の經驗の蓄積に依る作業能力の增大に就いても考へられ、また素質的能力の增進とも見られ、この外にまた勞働の喜悅といふが如き精神的餘剩價値 seelischer Mehrwert の存在さへ考慮せられてゐる。このやうに概念上の不統一はあるが、しかし一般に勞働に依つて作業能力が增大し、いひ換へれば勞働力がより强力なものとなる場合に、有機的餘剩價値が考へられてゐると見ていゝであらう。それにしても作業能力が年齡的に相當に消長の經過を辿ることは、寧ろ自然的な事實であつて、むろん仕事の種類に依つて異なるが、大體年齡二十五歲位から三十五歲位までの間に、最高能力の時代があるといつていゝ。其處でこのやうな經驗的事實を考慮に入れるとすると、彼の謂ふ內面的餘剩價値の概念が何處に實際上の根據を持ち得るか甚だ疑問であつて、それ故にそれは實際には全く概念的遊戲に過ぎないやうにも思はれる。しかしそれでも、これが多少とも意義を持つてゐることは否定し得ない。一つには內面的餘剩價値の概念はその反對の場合、謂はゞ勞働力の Raubbau の場合と對照されることに依つて、この危機的な場合に對する注意をより强めることは事實である。更らに勞働力に對する生産政策、即ち生産的社會政策、ゴールドシャイドは彼の社會生物學の立場から、これを Biotechnik と呼んでゐるが、この方策が一方では右の危機的な場合に對する豫防的方策であると同時に、他方では積極的に內面的餘剩價値增大の方策、いひ換へれば、勞働生産性の積極的增大策とし

て存し得ることが示されてゐる。第二に勞働力の償却といふ點からいへば、餘剰價値の生産はそれ自身では未だ充分の意味を持たない。それは生産可能の年限と合せて考慮せられることに依つて、初めて意義を持ち得ることゝなる。かくて人間の生産に事實從事し得る年限の大小が、先づ問題にせられることが遙かに重要のことであらう。ゴールドシャイドはまた別の場合に、次ぎのやうに述べてゐる。「勞働の生産性を增大しようとする努力に於いて、最も重要な問題は、生産性の期間を延長することである。各個人の最高能率の最大持續と民族の有能性の絶へざる高揚との裡に、經濟性の基本的規準がある。」（註六）

生産に於ける人間の浪費は、一般によく知られてゐるやうに、二つの形態に於いて現はれる。一つは勞働力の不自然なる質的低下であり、他の一つは生産可能の年限の短縮である。この二つの場合は共に、災害、疾病　過度の勞働消耗等の事實に、更らにまた各人の消費生活の內容如何に――この點で彼に依つて、消費の生産的意義が考へられてゐるのであるが――多少とも關聯する。そしてゴールドシャイドが特に此處に謂ふ所に依れば、これ等の望ましからざる現象は、勞働力の「生産性の限界」を超へることに起因する。そしてこの場合には價値の源泉が早期に涸渴するといふ危險にさらされる。かくて勞働力が早期に涸渴しないやうに、またその質的低下を防止するために、或はまた勞働力の充分健全な再生産のために、勞働力の有機的な償却が、償却期間の延長を前提として、適當に考慮せられることが必要である。

ゴールドシャイドの人間經濟學から、今一つの注目すべき所論が見出される。それは幼少年勞働と婦人勞働に關するものである。幼少年勞働に於いては、その勞働力の維持培養のために、特に愼重な保護方策が加へられない場合には、彼等の勞働力は容易に荒廢に歸せられる危險がある。また彼等の勞働力の將來の質的向上のためには、寧ろ幼少年者は勞働に從事せしめられるよりは、教育訓練と職業準備の施設の下に置かれる方が望ましい。そしてこの教育的施設の生産的意義に就いては疑ふ餘地がないが、尙ほ往々にしてこの教育的期間の短縮が希望せられる。しかしそれは常に勞働力の質的發展と相對的に考慮せらるべきことである。此處にゴールドシャイドの次ぎのやうな見解を挿入して置くのも興味あることであらう。例へば、生産可能の年限が平均僅かに十五乃至二十年に過ぎないやうな場合には、長期の職業準備期間は經濟的には充分償はれ得ないものとなる。從つて學校教育期間の短縮の傾向は、勞働力從つてまた一般に人間の早期消耗の必然的な結果である。これに反して、勞働力の償却を緩漫にし生産可能の年限を延長することが出來る場合には、職業準備期間を延長し、勞働力の質的改善を行ひ得ることゝなるであらう。また婦人勞働に就いては、彼は特に勞働に於ける母性保護を力說する。蓋し婦人には元來人間生産の重大な課題が加へられてゐるのであつて、從つて人間經濟學の立場からは、當然このことが第一義的な重要性を持つからである。彼が別の機會に述べる所に依れば、「勞働力が保護せられず、母性が社會的に大なる負擔を負はされてゐる場合には、また兒童が、窮乏の狀態にさらされてゐる時には、總ての生産性の源泉が無に歸せられ、價値の創造力自體の生長の基盤が荒廢に歸せられる。」（註七）かくて幼少年勞働者並に婦人勞働者に關する諸種の保護方策は、從來多くは私人の手に委ねられてゐたけれども、それ等の持つ生産政策としての意義が充分自覺せられることに依つて、それ等は正に國家の經濟政策の中核に置かれねばならぬものである。

以上私は、ゴールドシャイドの人間經濟學の概要といふよりは、寧ろその若干の基本的重要さを持つと考へられる問題を、簡單に抽出したに過ぎないのであるが、尙ほ此處にこれと關聯して、特異な彼の主張を多少附加して置くことが必要である。それは先づ倫理と經濟の問題に關するものである。

ゴールドシャイドの人間經濟學は、一見或はその名稱のために、また彼の發達經濟學に於ける一般的な人間經濟學的出發點の故に、經濟學の問題の內に倫理の問題を導入するものであると考へられ、また人間經濟學は經濟學に於ける倫理學派を代表するものに過ぎないと思はれるかも知れない。しかしこれは極力彼が排擊しようとする所である。そして彼のいふ所に依れば、從來のやうに人間を浪費すべきものでないと主張することは、決して今日既に蔑視せられてゐる人道主義からの單純な結論ではなく、それは何よりも先づ經濟的な要求である。宛かも技術家がその取り扱ふ機械を適當に保護するやうに、吾々が有機的機械である人間に就いて、その利用の適當の方法を探及し、その生產性を增大せんとすることは、同樣に單なる經濟的考慮であるに過ぎない。しかも純粹の資本主義經濟に於いては、人間の浪費は道德的な損失ではあるが、社會的には決して經濟的な損失であるとは考へられてはゐない。其處では人間が經濟的な價値ではなく、倫理的な價値のみが認められてゐることに依つて、却つて眞に國民經濟的な、國家的な重要性を持つ人間の經濟が輕視せられるといふ結果が齎されてゐる。そして從來の經濟學がまた經濟人 homo oeconomicus から出發して、人間經濟 oeconomia humana の法則を知らなかつた所に責むべき點がある。

確かに、既にレオ・フォン・ブッフのいふやうに、經濟に於ける人間の問題は、それが重要であればあるだけ、土地及び資本以上に、人間利用の最適方法を探及することに依つて、何よりも人間經濟の問題を重要視しなければならなかつた筈である。ゴールドシャイドの人間經濟學は、この意味では、ブッフの所論以上に出でゝゐる。そして人間經濟の問題の輕視は本來資本主義的生產に由來し、尙ほ倫理と經濟の問題の混交に煩はされた。しかもまた經濟學に於けるこの問題の輕視されて來た理由の一つは、ゴールドシャイドに依れば、從來經濟學の成立と發展は、無機的自然科學の著しい發達に依つて影響を蒙つたが、有機的諸自然科學の發展は寧ろ最近の事實に屬してゐて、このために從來經濟學に於いて、人間機械が充分考慮され得なかつたのも亦止むを得ないといふべきであらう。しかし今や吾々は、社會衞生學の發達に依つて、國民保健の問題が詳細に明かにせられ、且つそれが經濟問題として認識されるのに充分の時代に到達してゐる。また人口論は經濟理論の單なる附加物であることを止めて、寧ろ「人口經濟學」として中心的な地位を占むべきものである。即ちそれは勞働力の再生產、人間の生產と人間の加工に關する研究として、宛かも工業、農業、牧畜業と同樣に、其處に於ける自然科學的研究が經濟的關聯に於いて行はれることに依つて、充分の効果を擧げ得るであらう。

（註四）ゴールドシャイドの「人間經濟學」に關しては、彼の次ぎの三つの著作を擧げることが出來る。

1) Entwicklungswerttheorie, Entwicklungsökonomie, Grundlegung der Soziologie, 1911.

2) Höherentwicklung und Menschenökonomie, eine Programmschrift, 1908.

3) Grundfragen des Menschenschicksals, Gesammelte Aufsätze, 1919.

彼は發達經濟學と人間經濟學のために、三卷からなる厖大な研究計畫を持つてゐたのであるが、僅かにその第一卷が公にせられたに過ぎない。右に示した第二の著作がそれである。そして右に示した第一の著作は、この大きな彼の研究計畫の、謂はゞ綱要を示したものである。從つて彼の人間經濟學はこの三つ著作の內に――むろん彼自身の計畫からいへば、尙ほ充分論究せらるべき問題が殘されてゐるが――求められる。更らに私が右に第三に示したものは彼の論文集であるが、その內に Menschenökonomie als neuer Zweig der Wirtschaftswissenschaft (1914) といふ一論が加へられてゐる。そしてこの論文に於いて、彼は先きの三つの著作に於ける人間經濟學の所論を簡約して述べてゐる。

以下私は特別の場合を除いて、一々彼の所論の出所を明かにする煩勞を避けたいと思ふ。

（註五）Entwicklungswerttheorie, Entwicklungsökonomie, Menschenökonomie, S. IX.
（註六）Grundfragen des Menschenschicksals, S. 207.
（註七）Frauenfrage und Menschenökonomie, 2. Aufl., 4-6. Tausend, 1914, S. 30-31.

三

經濟生活に於ける人間の勞働の重要性は、ペッティ、スミス以後、經濟學者の考慮から全然引き離されてゐたのではない。また現に今日吾々は、通常の經濟學教科書に於いて、勞働が土地及び資本と共に生産の三要素を構成し、しかも時には勞働は他の二要素に較べて根源的生産要素である、と說かれてゐるのを見る。しかし他方實際の吾々の生活に於いては、土地と資本はその利用が科學化され、それ等の Raubbau は嚴に戒められてゐるにも拘らず、勞働力の利用に就いては未だそれ程の關心が惹き起されて來てはゐない。それは、ゴールドシャイドの觀る所に依れば、資本主義の下に於いては、先づ人間が過剩の存在であるとして取り扱はれることに基因するが、同時にまた人間は倫理的な價値を認めらるべき存在ではあるが、決して土地や資本と同樣に經濟的な價値を持つてゐるものではないと考へられることにも據る。そしてそのために從來の經濟學に於いては、人間は專ら經濟主體としてのみ考慮せられ、また社會政策に於いては、この意味に於ける人間の保護が問題とせられ、更らに社會問題、或は勞働者問題に於いては、從來主體的、社會的存在としての人間に就いて、個人主義的に、また階級的に考慮せられることが多かつた。しかもこの孰れの場合に於いても、人間の存在が重視せられてゐることは事實であるが、却つてこのために生産要素としての勞働、從つてまた人間が經濟的な重要性に於いて充分考へられることが妨げられて來た。更らにしかし經濟學が國民經濟學であり、人間の勞働の國民經濟的重要性を充分認知するためには、人間に關する從來の經濟學の伝統的思考から暫らく離れて、先づ人間を經濟的客體として把へることが必要である（註八）。そして此處に初めてよく、勞働の生産性に關する考慮が展開され得る。凡そこのやうに考へることから、ゴールドシャイドの生産に於ける「人間經濟學」は發足する（註九）。最近吾國に於いて、生産に於ける人間が「人的資源」として問題にせられるやうになつたことは、勞働生産性增大の緊要な國家的要請の必然的な表現であつて、これは正にゴールドシャイドの人間經濟學に對する基本的な立場と相通ずるものがあるといつていゝであらう。

人間が生産に於ける客體として把へられ、同時に人間に關する倫理的觀念に依つて煩はされることのない場合に、よりよく勞働力に關する客觀的、科學的研究が展開され、そして此處から透徹した形態に於いて、勞働生産性增大のための諸方策が樹立され得る。この諸方策が一方では勞働力濫費に對する豫防策として、他方では勞働力の質的改善の積極策として展開せられることはいふまでもないが、この內特に、勞働力濫費に對する豫防策、更らにまた傷害を蒙れる勞働力に對する治癒策は、大體勞働者保護の形態に於いて現はれる。しかしこれ等の勞働者保護政策は、倫理的、主體的存在としての人間に對する保護政策であると考へられる前に、先づその勞働の生産性に對する影響から判斷せられることが必要である。このことは從來多く看過され、或は輕視されて來たところであつて、また今日尙ほ往々にして、この倫理的な考慮と經濟的な考慮とが逆に置かれようとする傾向が甚だ强い。そしてむろんこのことは、現實に人間を對象として何等かの方策を執りつゝある實際家の場合には、ある程度までは許されねばならんとも考へられる。しかし吾々が何處までも科學的な立場を保存する限り、この點に就いては充分の注意を必要とするであらう。從來社會政策が生産政策としての意義を充分自覺されず、從つてまた生産政策としての充分の形態が與へられなかつた理由の一つは、右の點に存することを何人も否定し得ないであらう。しかし既に「人的資

源」の問題を取り擧げた今日の吾々の場合には、從つてこの意味に於いて、現に展開されつゝある諸種の勞働者政策が科學的に評價され、配慮せられることが必要であらう。

人間の勞働力の客觀的、科學的考察に際して、ゴールドシャイドが吾々に示してゐる次ぎの二つの見解は、確かに重要のものである。即ち、第一には、勞働力は全人的存在としての人間の所產であるといふこと、そして第二には、人間は單純に遺傳的素質に依つて特質づけられるのではなく、またこの生來素質は後天的に不變的、恒常的であるのではなく、吾々に取つて遙かに重要なことは、素質が環境との關聯に於いて重大な變容を受けるものであること、從つて此處に環境調整の意義が認められると考へられてゐること。この二つの主張の内、第一の點に就いては何人も異論をさしはさむものはなからう。しかし第二の點に就いては、吾々は尙多少愼重な態度を必要とするであらう。遺傳と環境に關するこの問題は、謂はゞゴールドシャイドの最大の基本問題であつて、彼自らはこの點に就いてグーウォン學說の檢討に多大の努力を示してゐる（註一〇）。しかも今日の吾々としては次ぎの如く考へていゝであらう。從來遺傳學は相當に發達して來てゐる。しかし全人的存在としての人間に就いて、有ゆる方面の遺傳學的研究が未だ充分確實な結論を吾々に示し得てゐるとはいへない。特に心理學的遺傳學的研究に於いて然りである。それ故に人間の生存に對する環境調整の意義を、彼のやうに、理解していゝかどうかに就いては、吾々は暫らくその判定を差し控へる方が科學的にはより愼重の態度であるであらう。しかしこのやうに愼重の態度を取ることは、決して環境調整が全然無意義であると考へることではない、といふ點に就いて讀者の誤解のないことを望みたい。

環境調整の基本的意義の如何は別問題として、勞働力が全人的存在としての人間の所產である、といふ見解を更らに少しく顧慮してみよう。全人的存在としての人間は、いふまでもなく、社會的、精神的、肉體的な面を持つ統一的な存在である。從つて勞働力はまた人間存在のこれ等の諸種の面から同時に考究されねばならない。かくてゴールドシャイドは、國民の健康とその有能性 Volksgesundheit und Volkstüchtigkeit の經濟的意義を明かにするために、社會の高度發展の豬前提に關する自然科學的、社會學的、價値理論的研究を精密に行ふことを必要とした。そしてこれ等の研究に基づいて、數代に渡つて計畫された大規模の保健所に於いて、國民全體を謂はゞ新たに保育して行くことが必要であり、このことは肉體的には環境の改善、肉體的機能の最適化と劣性遺傳の排除に關する、發展を意圖する計畫的な努力に依つて、また精神的、道德的には、內面的、外面的、個人的、社會的順應過程に於ける統率者としての大腦を最適のものとすることに依つて、達せられる（註一一）。勞働生產性の增大のために、勞働力が全人的存在に依つて規定せられるといふ立場から、このやうに多方面の理論的並に實踐的研究を必要と考へたことは、正に今日の吾々から見れば、彼が此處に勞働科學の重要性を意識してゐたことであるといつてもいゝ。そして今から約三十年前の彼に知られてゐたのは、社會衞生學の發達と、ティラーの科學的管理法とミュンスターベルクの經濟的精神技術學と、更らにドイツ社會政策學會の大工業勞働者に關する生活調査であつた。そして彼はこれ等の各々が持つ勞働生產政策としての意義を充分に認めてゐた。唯だ幾分の難點をいへば、彼が充分それを認めてゐたにも拘らず、また前世紀末以來、ゲェーレの研究から右の社會政策學會の調査に至るまで、ドイツでは勞働者心理學の研究が既に有力に發展してゐた（註一二）にも拘らず、勞働者心理學的考慮が彼には充分攝取せられてゐないことである（註一三）。かくて彼に於いては、勞働の主觀的要因――これは吾々の立場からいへば勞働の主觀的可能性と呼ばるべきものである（註一四）――が未だ左程明かに問題とせられず、勞働の客觀的可能性に關する

Biotechnik が遙かに重要な地位を與へられてゐる。しかし假令このことがあつても、吾々が彼を以つて彼以前の生産的社會政策論者（註一五）の誰よりもよりよく、勞働科學の重要性を認識した一人である、といふのに何の憚る所もない。

勞働の主觀的可能性が、勞働の種類の如何を問はず、一般に勞働を根源的に可能ならしめるものであることに就いては、此處に多言を要しない。しかしてこの根源的な重要性にも拘らず、勞働の主觀的可能性に就いて、從來は素より、今日に於いても尙ほ充分科學的な考究が進められてゐるとはいへない。――とはいへ、この重要性が現實の勞働に就いて、既に舊くから認められてゐたことを、私が此處に否定しようとするのではない――そしてこの方面の科學的研究が一般に未發達であるといふことには、むろん色々な理由が考へられるが、何よりも此處では、次ぎのことを指摘して置くのが必ずしも無意義ではなからう。第一に、人間を生産過程に於ける客體的なものとして考へることは、容易に、また單純に、人間を機械に對照して考へやうとする傾向を生ぜしめる。かくて既に早くから「人間機械」に就いて語られたのであるが、ゴールドシャイドの場合にも同樣に、人間機械、或は有機的機械といふ言葉が屢〻用ひられてゐる。そしてこのやうに人間機械に就いて考へられる場合には、人間の肉體的、生理的方面、いひ換へれば、勞働の客觀的可能性に就いては充分考究せられるにも拘らず、その主觀的可能性は科學的考究に於いては甚だ輕視せられ勝ちである。其處で吾々は何時でも、人間が常に機械以上の存在であることを、認めて置かねばならない譯けである。これに反して第二に、勞働の主觀的可能性を問題にすることは、機械以上の存在である人間の、謂はゞ人間的な面を取り擧げることであつて、從つて此處ではまた容易に且つ單純に、人間に關する倫理的な考慮が入り込む傾向が強くなる。そしてそれが現に人間を取り扱ふ實際家の場合でも、また吾々の場合でも、意識的であると否とを問はず、人は往々にして人間を生産過程に於ける客體的存在から引き出し、同時に經濟的考量から引き離さうとする。從つて人間を客體的な存在として把へやうとする科學的態度に於いては、先きの人間機械論が先づ全面に強く現はれて來るのも、或は自然であるといつてもいゝかも知れない。其處でこのやうな二樣の不徹底な科學的態度から、吾々が逃れ出るためには、勞働の全人的な構造を明かにすることが、吾々に取つて何よりも先づ必要なことゝなる。そしてこの問題こそ、今日の勞働科學に課せられた基本的問題を構成する。しかし今日の勞働科學がこの基本的問題を既に充分滿足な理論的形態に於いて解決し得てゐるとはいへないのであつて、尙ほ吾々の心すべき問題が此處にあることを認めて置くことが必要であらう。

最後に、ゴールドシャイドの勞働生産性に關する見解の內で、吾々に取つて興味があり、且つ重要であると考へられるものは、先きに指摘した所に依つていへば、勞働力の償却、勞働力の生産性の限界、並に生産性の期間 Pro-duktivitätsperiode の三つの概念である。そして私の觀る所では、これ等の三つの概念は相互に關聯するものであり、それ等は結局勞働生産性の概念の內に統一せられることが必要であると考へられる。しかも彼にあつては、必ずしもこの點が明瞭にせられてゐるとはいへないのであつて、從つてそれだけに例へば勞働力の償却、勞働力の生産性の限界といふ概念は抽象的には兎も角として、實際生活上の事實に對照しては、理解に稍々困難なものを含んでゐる。

以上私はゴールドシャイドの人間經濟學を極く粗雜に問題として見たのであるが、今日吾々の當面の重大問題の一つである吾國の勞働者政策の問題から見て、私が此處に讀者に對して、彼の見解の內に尙ほ幾分吾々の學ぶべきものゝ存することを、知らしめ得たとすれば、私のこの小論の目的は充分に達せられてゐる。

（註八）ゴールドシャイドはこのやうに、彼の人間經濟學に於いて倫理的な考慮を排除してはゐるが、人間がその有ゆる行爲に就いて經濟的な考慮に透徹する場合には、この「透徹せる經濟的自覺に基づいて、しかし最も圓熟せる倫理的自覺と自決とが可能となり、この倫理的自覺と自決とはもはやその規準を經濟的考量に借りる必要を見ないものとなる」と述べてゐる。(Grundfragen des Menschenschicksals, S. 130.)これを以つて觀れば、彼の人間經濟學に於ける對象である人間自體は、倫理的な存在であると考へられてはゐないが、しかし彼のこの經濟學的努力は結局倫理的存在としての人間を前方に豫定するものであるといつていゝ。また言葉を換へていへば、彼の人間經濟學は謂はゞ倫理的に完全な人間を創り出すための道を切り拓かうとするものであるといつてもいゝであらう。

（註九）ゴールドシャイドの人間經濟學は、既に本論第二項の最初に私が指摘して置いたやうに、富若しくは財の經濟學に對して、遙かに高くその重要性を認められてゐるものであるが、このことは彼の次ぎのやうな言葉の内に最もよく現はれてゐる。即ち、「フィジォクラートは土地が總ての財の唯一の根源であるとなし、しかもこの偏頗なる誇張にも拘らず、經濟理論中に著しく示唆に富む思考を導入したと同樣に、人間自體が何の範圍に於いて一切の文化の、また一切の經濟的生產性の母體であるかを、指摘することが今日必要のことである。土地の濫用は人間力の濫費程の破壞的な結果を持つものではない。」そして彼自らはこのやうな人間經濟學を Menschenphysiokratismus であると呼ばうとさへしてゐる。(Höherentwicklung und Menschenökonomie, S. 587.)

（註一〇）Vgl. Höherentwicklung und Menschenökonomie, Kapt. I-IX.

尙は彼には別にダーウヰンに關する次ぎのやうな著作がある。

Darwin als Lebenselement unserer modernen Kultur, 1909.

（註一一）Höherentwicklung und Menschenökonomie, S. XXI.

（註一二）ドイツに於ける勞働者心理學の發展に就いては、私は數年前の著作中に稍々詳しくこれを述べて置いたので、讀者はそれを參考にせられたい。

拙著　經濟心理學（昭和十年）後篇　第一章

（註一三）それでも彼はある場合に次ぎのやうに述べてゐる。即ち、「愼重に規制せられた勞働の場合には、それはむろん生產性の限界を强力に犯さない場合であるが、其處では客體的な生產物に於ける餘剩價値の外に、素質の發展の形態に於ける有機的餘剩價値が成立するし、更らに勞働の喜悅の内に、また勞働の結果に對する滿足の内に現はれて來る精神的餘剩價値さへ生ずる。」(Grundfragen des Menschenschicksals, S. 202.)

（註一四）拙稿　勞働者政策・基本問題（本誌　第三十四卷　第十號　二六四―二六五頁　參考）

（註一五）この生產的社會政策論者に就いては、本論註一中に示して置いた拙稿を參考にせられたい。